

# 十月作品

## 月集スバル



☆今月の四人☆

丈詰め

日影 康 子 富 山

整理する冷凍室に見つけたるハーゲンダッツ二個夫には内緒  
病む夫の明日は訪問入浴日あたらしきパジャマの丈詰めをする  
通り雨に倒れし庭のホタルブクロ下の子逝きて十年を経つ  
「兄ちゃんのようなランドセルほしいよ」と大泣きしたる三歳忘れず  
コロナ禍に自粛・三密と季すぎて庭石に出会ふ精霊バツタ

ごんぎつね

木 畑 紀 子 京 都

生きるとは悲しみの数ふえること孫に「ごんぎつね」読んでしまった  
兵十とごんのこころの行き違ひ 六歳は言ふ「むかしの話だ」

登校のマスク一団過ぎしあとくちなしがにほふ 子らに幸あれ  
時々刻々感染列島塗られゆく(コロナ)が(愛)であればいいのに  
会はざるは会ふにまさるやこころの扉たたきてくるる歌の音信

さながら楽堂

津 金 規 雄 神奈川

山毛櫨林のぶなの樹の肌白ければ明るむ林歩をゆるめたり  
ピンズイにヒガラも織く鳴き交はしさながら楽堂ぶな林のなか  
蛾の仔毛虫、蝶の仔芋虫それぞれに生を紡ぐよ青葉繁れば  
都邑はるか樹々の香の濃き登り路に肺碧あをと染まりゆくらし  
盛んなる緑に埋もれ慎ましくホモ・サピエンスとして息吸ふ

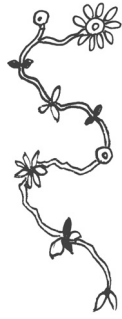
若き二人の死

田 中 愛 子 埼 玉

二度寝する夏の朝の力満ち夢のなかにて大根きざむ  
うたた寝よりめざめる度におはやうを言ひて土用のまひるも元氣  
遠因は伝染病なりわかさの若きロミオとジュリエットの死  
夕食の膳にそろそろ塩焼きの鮎の頃か 湯の宿とほし  
天の川ながるる夜の空谷の清流に出づオオサンショウウオ

☆

☆



高野 公彦 千葉

人の歌読むこと楽しわが歌も時をり詠みて日没閉門  
コロナ禍の夜々の独酌楽しけれど友と飲む酒こそ旨き酒  
冷奴に茗荷がうまし佳き香りありて人生の一隅明る  
忘却が我を包むか年取れば取るほど人生の初心者となる

水島 晴子 兵庫

仲 宗角 三重

坂うへの寸土に生きて浜木綿は百重なす花しろく解きそむ  
目まひせむほど痺れたる右の手でレタスの片を箸さきき追ふ  
苑の実に毒かもありや朝またも胸のけぞらし小鳥落ちをり  
七夕の雨の夜過ぎて目白ふたつ泥染む骸が木下に列ぶ  
「茶色くて甘くてあれは……」名を捜し「かすてら」と老いはつひに叫べり

カミナリにうたれて死んでるけものなし皆かたまつて声立つるなし  
草木国土これだけあらせば万足かイルカの群が沖から寄せくる  
ときには止みやすみて居ると地がゆれる地震のくるをイルカが知つてる  
風伝峙のむかうからやつてくるのがやはり一番こはいが仲間だ  
山仕事切りあげ下りくる人ら村の居酒屋に頭からつつこむ

杜 沢 光一郎 埼玉

奥 村 晃 作\* 東京

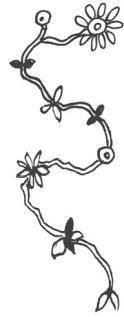
古い深ければ手の甲にも白毛が混じるらし夜半に物書けば妙にキラキラす  
乗る時にも降りる時にもエスカレーターでタタラなぞ踏むなスマートにゆかん  
俺様が渡りきる迄は赤に替るなよと念じつつ渡りゆく長き横断歩道を  
遅れたれば9月号詠草と書きにしが届きし8月号にわが五首も載る  
欠詠抜ひにはせずわが五首も載せてくれぬ五日も遅れし老人のFAX詠草

武 田 弘 之 神奈川

森 重 香代子 山口

在りし日の生の証の歌集なりつつしみて読む『落葉樹林』  
読み辿る君の歌集に出くはしてなつかしきかな設楽の鬼は  
「雪」の文字百五十余り鏤めて北国を抒情す君の歌集は  
励み合ひ楽しかりけり宮柊二朱鷺幻想」歌碑建立のため  
ありやうは素直、親切、実直を貫きましし一生なりけり

降る雨に供花と摘みたる紫陽花はかがやく水を手降り零す  
摘み取りて指に廻せば光りつつ雨露はじくあちさる一花  
ふるさとの茅の径の蘇り長くはあらぬわれの行く末  
肋膜炎わづらひし若き日のありて密かに怖るコロナウイルス  
歌のおもひは極めてかすかなもの、追空の書に残る傍点



古屋 祥子 群馬

空をゆく風は見えない　されど地をゆく風は伸びし麦をなびかす  
戦時教育共に受けたる患者同士、話が合へば肩たたき合ふ  
コロナ禍とみなひと口におびえ言ふ　ほかの理由もあるであらうに  
うごくもの何にても佳しつばきの葉　雨のしづくの反動さへも  
サツポロ一番フレーム工場はボイラーの湯気を絶やさず夜も日もすがら

影山 一男 千葉

志村けん岡江久美子をたたふべし令和二年の国民栄誉賞  
夏空を仰ぎ水飲む若さあれ池江璃花子の瞳のごとく  
江戸の世の慣ひ昭和に続きけり父が行きにし「大山詣り」  
父があて昔の人ら生きてをり「大山詣り」の長屋連中  
酔へばすぐ喧嘩をしたる父たちが語られるたり「大山詣り」

桑原 正紀 東京

いつしらに蚊の飛ぶ音の聞こえなくなりてこの夏喰はれはうだい  
あちこちが痒くて目覚む耳すまし目をこらせども蚊を捉へ得ず  
耳とほく目もわるくなるは摂理にて後ずさりゆく徐々にこの世を  
唐突に思へりもしもウイルスのうじやらもじやらが見えたら怖い  
東京の夜ぞらの上にあるはずの星くづの燦めつむりおもふ

狩野 一男 東京

文学的などと言はれて今朝も穿く濃みどり色の古びたズボン  
バス、電車乗り継ぎ通ひ四か月マスクするため眼鏡はづして  
あぢさゐに負けはしないと(宮柊二の)百日紅の花咲き始む  
くれなゐの花を咲かせて並び立つ百日紅の社会的距離  
汗かきで短気な老いが見上げをり百日紅のくれなゐの金

宮里 信輝 神奈川

年々に日本列島を蹂躪す梅雨前線と呼ぶ巨大竜  
増えすぎたヒトへの地球の戒めかCOVID-19、飛蝗、豪雨は  
地下ふかくひそめる竜も動き出し焼岳、富士山噴火の兆し  
八月が近きに蟬のこゑ聞かず梅雨びたしなる2020夏  
第二波の感染爆発オーバーシュート　三密避け感染はせず、感染させず

岡崎 康行 新潟

戻りかけしドアわたしに踏まれつつじりじりと締められないでゐる  
独り何をしてゐるならむ不要不急の用などあるはずもない子は  
つれあひは音なくわらひ離れたり蛙の舌力ゼッリョクを読むわがかたへ  
ツノガエルの舌ノ粘着力のこと読みてをり天気図の湿舌から始まつて  
ほろろんと水に包まるる粒なりきわれの体を撫でし空気は

小島 ゆかり 東京

ポストさへ探しあぐねて新住民われはほとほと水鶏のごとし  
六月の肌にしみいるなつかしきにほひありこの町も武蔵野  
なにもかもいやと言ひたくなつたころ口開かぬ顎関節症あごになる  
やれるだけやるしかないと思ふころ右手しびれて腱鞘炎になる  
からだ溶けて消ゆるなめくぢをおもひつつ七月の暴れ梅雨に濡れたり

島田 暉 神奈川

冥土などあるはずもなし冥土など思ひ画けばそれで終りよ  
満ち欠ける月より見れば僕などはただひと時の光のほめき  
老いの身に花といふべきものあるや薔薇は老いても花の香りす  
死がそこに近くあるごと思はれて赤き椿の花のまま散る  
子を連れて来たと泣く母 病室の窓より飛び降りいっしょに死ぬと

大松 達 知\* 東京

いつかだれかが撮ったブンボーフェの写真みながら食べるブンボーフェを  
さんざんに野菜を食ってきた牛を食いつつ野菜まだまだ足りず  
アトビーが邪気を祓うと思わねどすこしは思う無難に五十  
（非表示にする）ができない湿疹を額にさらしていちにち過ごす  
ワイシャツのボタンひゅひゅつと留めてゆくこれを着ると死ぬ気がしない

田宮 朋子 新潟

巻貝の秒針めぐりとつとつときざざみをり置時計（海）  
信濃川分水の濁流そそぎたる海の色あひ二分けとなる  
どくだみの浮く湯のなかで目瞑りぬ両生類の気分となりて  
たぶのきの巨木に恋をすることくまつはりて飛ぶ青筋鳳蝶  
梅雨晴れの空のかなたを白金の飛行機ひとつ北を指しゆく



小山 富紀子 京都

口もとに良きほくろ持つ佳き人の運を塞ぎし感染予防マスク  
いつもパンもらひし茶房廃業し今日も空腹コロナ禍の鳩  
一年で一番暑き祇園会に鉾無く妖しの涼気漂ふ  
あの祭この祭みなつつしめどつつしめど増ゆる感染者数  
取り止めの行事に日々を重ねをり十日鉾建、今日は曳き初め

清水 正子 神奈川

オタク女子ならぬ老女のわたくしが短歌三味のコロナ籠もりす  
砂糖菓子（二人静）をふふみをり夜のはじめごろ口寂しくて  
何も彼もコロナ抜きでは決まらない晴れも曇もなく人に会へない  
サムシング・グレートいづこ神呼びの太鼓さながら遠雷きこゆ  
県をまたぐ移動の自粛けふ解かれダイラポッチララポッチゆく

小嶋 一郎 佐賀

昼ひとり胸気つのらせコロナ禍のニュース視てをりマスクを填めて  
目薬を注さむと眼鏡外すときマスクも除いて素顔となりぬ  
眼鏡掛けマスクを填むるとき気付く耳朶同士見合ふことなし  
家籠る自粛疲れに缶ビール空けてはてさて摘みは無しか  
コロナ禍で人影あらず路は路、家並みは家並み日差しの下に

後藤 美子 北海道

朝曇りエゾハルゼミの声沸きて変らぬ今日がはじまる気配  
こころぐく日々家ごもりハルゼミの頭を打つこときこゑ山に満つ  
マンシヨンの入りに盛りのライラックマスクはづして仰ぎ深呼吸  
幌延のブルーポビーが見ごろとなり思ひ出づ笑顔の宮英子さん  
ヒマラヤの青い芥子恋ひ旅ゆけるひとの思ほゆ時過ぐる速し



福士りか 青森

ウイズ・コロナ、アフター・コロナ、ネオ・コロナ広告コピーのやうな現実  
コロナ・ウイルス感染者ゼロの岩手にて(いつ)かが魔物のごとく肥大す  
派遣型風俗嬢の感染を聞けば異なるザワツキ具合

ウイルスの火種はあくまでも火種 秘めつつ旅に出よと政府は  
「大丈夫」は立派な男を語源とす「立派な男」が言ふ大丈夫

藤野 早苗 福岡

ひつじぐさ目覚めるころかテレワークの夫を離れて池に来し午後  
むんむんと温気うんきの中によどみよどみをり山笠やまがさの動かぬ博多の夏は  
失ひて街の老いたり男らが若夏彦わかしげとなれる山笠

けふも雨梅雨前線押し上げる夏の膂力の充実いまだ  
帰省する子に食べさすとズワイガニコールドスリープして三カ月

風間 博夫 千葉

「たてせん」で仕切るふたつの「さんかく」の絵柄、開・閉のふたつのボタン  
底辺を向かひ合はせて「さんかく」を左右に描く開くのボタン  
頂点を向かひ合はせて「さんかく」を左右に描く閉まるのボタン

開くのか閉まるのか「さんかく」マークではときに戸惑ふ開閉ボタン  
「開、閉」の文字では駄目かをさな子や外つ国の人乗るを思へり

橘 芳園 新潟

親鸞が和讃案じて歩みけむ五条西洞院じじょういんの小路静けし  
訪ふ人のありやと来たる延仁寺親鸞茶毘所の供花新しき  
親鸞の念仏の声しみてゐむ叡山横川よこがわの杉森歩く

御来迎待ちし先師を敬へど待つ要なしと親鸞言ひき  
信じねば知識のままになるならむ親鸞全集机に並べ置く

水上 比呂美 東京

夜明けまへケータイ小さく震へたりこんな時間に呼ぶのはだれぞ  
点滅をくり返し返しあふる青き点モールス信号、われの心音

夏草をかきわけかきわけ進むやう行つてはならぬ場所ある会話  
ケータイの向かうの果てしなき闇に点る小さな青き灯おもふ  
ケータイに黙もたの深さを測りつつ梅雨どきの朝の風音を聞く

鈴木 竹志 愛知

長旅はできぬと思ふこの夕べまづは近隣周遊の旅  
近隣を徒歩にて巡る旅なれど日々発見はありてうれし  
年内の遠出は無理かと断念しテレビに向かふ 独り観光

朝ドラも大河もすでに次回なく弥縫策なる再放送見る  
マスクするをみなの手にはハンディファン必携ならむ名古屋の夏に

原 賀 璽 子 東京

コロナ禍で人が変はれば街住みの鳥のくらしも変はるのだらう  
片羽根の身となる鳩の肉塊を引つぱり、はがし、食ふ大鴉  
見なさいといふ声がある 食ふ鳥と食はるる鳥をしかと見なさい

飽食にちからを得ては残骸の鳩をくはへて鴉とび発つ  
夜半おもへば相対死を見たやうな食はるる食ふの鳩鴉きょうあのちぎり

水上 美季 東京

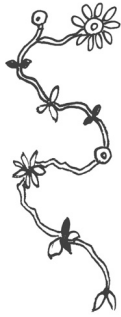
いつまでも買ひたいハンドソープ無く小糠雨ふる道を歩きぬ  
日射し受けるくるくる泳ぐえびの傍まどろみてをり脱皮せぬわれ  
月駆ける自転車思ふ水中を過ぎゆくみなみぬまえびを見て  
レジ袋に夢は詰まつてゐなくつて1Kの隅に袋たまりゆく  
都知事選に清き一票投じてもけつきよく先の見えない夏だ

大野 英子 福岡

日も暮れぬ博多中洲の中通り人あふれドブネズミ駆けゆく  
白マスクで顔を覆ひてけふもまた戦闘モードで仕事に向かふ  
議員らのポーナス満額支給され世間の痛みを判る筈なし  
長靴を履いてもピッチピッチチャブチャブとなれず街川増水止まず  
コロナ禍も止まずに局地的豪雨、避けて通れぬこと増えて夏

松尾 祥子 東京

丹田に鎮まらぬ気はのほりつめ入道雲のやうなる頭  
靴下を四枚重ねして眠る雨に打たれてゐたのはこころ  
二度童子となりたる母は幼子とゾウさんのバッグ取り合ひをせり  
梅雨寒の早き日暮れを幼子は背中とんと叩きくれたり  
「はぴばすで」まはらぬ口で唄ふ子は指二本立てて拍手されたり



桑原正紀歌集 令和元年9月刊 二六〇〇円(税別) 送料三〇〇円

秋夜吟 コスモス叢書第1166篇 青磁社

著者住所 〒173-0037 東京都板橋区小茂根三一九一八-一〇六

木畑紀子歌集 令和元年7月刊 二七〇〇円(税別) 送料三〇〇円

かなかなしぐれ コスモス叢書第1157篇 現代短歌社

著者住所 〒610-0357 京都府京田辺市山手東一-二二-二〇

福岡市文学賞受賞

大野英子歌集 令和元年9月刊 一三〇〇円(税別) 送料三〇〇円

甘藍の扉 コスモス叢書第1159篇 柘書房

著者住所 〒812-0028 福岡県福岡市博多区須崎町三一六-三〇二

島田 暉歌集 令和元年9月刊 二六〇〇円(税別) 送料三〇〇円

記憶の炎 コスモス叢書第1162篇 角川書店

著者住所 〒246-0015 横浜市瀬谷区本郷一-一四-一六